夢の上2

紅輝晶・黄輝晶

多崎 礼
Ray Tasaki

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵
挿画　天野　英
DTP　ハンズ・ミケ

夢の上 2 紅輝晶・黄輝晶

ツェドカ
ハウファ・
アルニール
アライス
エシトーファ・
ツァピール
アルティヤ

イズガータ・
ケナファ
ダカール
シアラ
トバイット
アーディン

幕間（三）

夢売りは次の彩輝晶を手に取った。
三つ目の彩輝晶は血のように赤い紅輝晶だった。
選ばれたことを察したかのようにそれは輝きを増す。夢売りの手の上で、赤い幻光が炎のように揺らめく。
「心の炎――その情念がかくも美しい紅輝晶を生む」
静けさを破って、夢売りの声が広間に響く。
「身を焦がす炎。成し遂げられぬ夢。それは仮初の時空を得て、一時の夢見となり、ついには塵となりて無に還る」
夢売りは紅輝晶を左右の手で包んだ。
それを口元に近づけ、ふうっと息を吹きかける。
まっすぐに差し出された両手。開かれた掌とともに紅輝晶が花開く。
赤黒い炎が燃え上がる。うねるような炎に炙られて、夢売りの手もまた血塗られたように赤く染まる。
薄く尖った花片。赤々と燃え上がる花芯。すべてを切り裂くほど鋭く、すべてを燃

やし尽くすほど激しく、怖気立つほど美しい。火中に咲く孤高の花。
「これは誰よりも熱く、誰よりも激しい夢に身を焦がした『復讐者の遺言』」
びょうびょうと荒れ狂う風の音がする。
錆と土と、血の臭いがする――

第三章　紅輝晶

後悔していないと言ったら嘘になる。
私にもっと知恵と勇気があったなら、
これとは別の道を選べたかもしれない。
未来ある若者達の時空を
奪わずにすんだかもしれない。
でも私は弱く愚かだった。
許すことも忘れることも出来なかった。
私は
復讐を望まずにはいられなかったのだ。

闇は怖くない。夜は優しい。
そう教えてくれたのは、サフラだった。
昼は光神サマーアが支配する世界。神の御許(みもと)にお

いて人々は勤勉に働く。だが夜の闇は光神サマーアの姿を覆い隠す。そこでは人々は初めて安らかな眠りにつくことが出来る。
　けれどあの夜は違った。魂を切り裂くような悲鳴で私は目を覚ました。寝台に身を起こし、夜の闇に耳を澄ませる。
　静寂を破って、叫び声が聞こえてくる。

おおう……おおうおうおう……

　言葉にならない声。それは胸が抉(えぐ)られるような慟哭(どうこく)だった。私は夜衣の上にガウンを羽織ると寝台を離れた。鎧戸(よろいど)を開き、外の様子を覗き見る。

赤茶色の屋根が連なる町。いつもと変わらない夜。慈悲深い夜の腕に抱かれて、アルニールは深い眠りについている。

その時、町の一角がぱあっと明るくなった。

一瞬遅れて爆音が響く。ビリビリと空気が振動し、私の体を震わせる。真っ赤な炎の柱が噴き上がり、黒い煙が天を覆う。

「ハウファ様！」

扉が開く音。低い声が私の名を呼んだ。

振り返ると、戸口にサフラが立っていた。真夜中だというのに平服を身につけ、片手に小剣を携えている。浅黒い肌、長い髪。焦茶色の思慮深い瞳が光る。木灯の光を宿して青白く光る。

「何が起こったの？」

私の問いには答えず、サフラは私の手を取った。導かれるままに私は階段を下り、玄関広間に出る。そこには数名の使用人達と父ジャサーラ・アルニールの姿があった。

「何が起こったのですか？」

私は父に問いかけた。父が答えようとした時、扉が開いて男が駆け込んできた。時空鉱山で働く鉱夫の一人だ。

「お館様、お逃げ下さい」

煤けた手足。ボロボロに焼け焦げた服。彼の様子を見て、私はようやくことの深刻さを悟った。

「誰だ？」押し殺した声で父が尋ねる。「誰が喰われた？」

魂を喰われた影使いは鬼となる。

あの炎は、鬼の発生を意味していたのだ。

このアルニールでは多くの影使い達が暮らしていた。彼らは鉱夫と一緒に時空鉱山に入り、死影達の手から鉱夫達を守ってきた。もし鬼と化す者がいれば、彼らは真っ先に駆けつけて、それを倒す。同胞であっても家族であっても同情は許されない。影使い達に課せられた非情な掟。それがこのアルニールを守ってきたのだ。けれど――

「鬼になったのは見たこともない男です。あれは町の者じゃございません。どこかから運ばれてきて、この町に投げ出されたんです！」

煤けた男は悲鳴のように叫んだ。

「これは謀略です。聖教会の策略です。じき神聖騎士団がやってきます。お館様、どうかお逃げ下さい！」

影使いを庇うことも、ともに暮らすことも、光神サマーアへの背徳行為だ。それはアルニールに住む者ならば皆承知していた。もしこの事実が聖教会に知られたら、この町を治める小領主ジャサーラ・アルニールでさえ厳罰は免れないということも。

だから父もアルニールの民達も、聖教会にことが発覚しないよう細心の注意を払っていた。

それでも、悲劇は起こってしまった。

開かれたままの扉、外から爆音が聞こえる。闇の中、光木灯を手にした人々が駆けていくのが見える。

「聖教会の奴らめ、思い切ったことをする」

父は不敵に笑った。それは小領主アルニール伯としての顔ではない。あの大将軍エズラ・ケナファの右腕として名を馳せた稀代の豪傑、騎士ジャサーラの顔だった。

「我が剣と甲冑を持て！」

響き渡る声で父は命じた。使用人達が慌てて駆け出すのを確かめてから、煤けた男に向き直る。

「女子供を避難所に急がせろ。『使い手』を集めよ。戦える男達は武器を持て。時間を稼ぐぞ！」

もしこれが聖教会の陰謀なのだとしたら、どんな言い訳も通用しない。彼らの目的はアルニールを滅ぼすことなのだから。だとしたらどこに逃げても無駄だ。父は神聖騎士団を迎え撃つつもりなのだ。

「サフラ――」

召使いの手を借りて甲冑を身につけながら、父はサフラを振り返った。「娘のことを頼んだぞ」

サフラは小剣の柄を握り、真顔で首肯した。

それを見てから、父は私に視線を向ける。

「ハウファ、怨むならこの父を怨め。決してエズラ様を怨むでないぞ？」

騎士を引退し、領地に戻ると同時に、父は影使い達を土地に受け入れ始めた。それは彼の意志であり、ケナファ侯の意志でもあった。だからこそ不測の事態が発生したならばすべての責任を被ろうと、父は最初から覚悟を決めていたのだろう。

ここで別れたら、もう生きて再会することは叶わない。だが私も騎士の娘だ。最後まで気丈に振舞った母のように、私も泣き叫んだりはするまい。

「お父様、ご武運を」

「ああ、お前も達者でな」

革手袋と手甲に覆われた腕で私を抱きしめてから、父は身を翻し、館を出て行った。その背を見送っていた私の肩に、サフラがそっと手を置く。

「参りましょう」

私は頷いた。裏口から屋敷を抜け出し、町外れを目指す。そこにある穀物倉庫、地下には隠し部屋がある。万が一の時はそこに逃げ込むよう、アルニールの民達は常々言い含められていた。

町の大通りは人で溢れていた。サフラはしっかりと私の手を握り、人々をかき分けながら進んだ。

家々の屋根を舐めるように炎が燃え広がっていく。火花が爆ぜ、黒煙が渦巻く。飛び散る火の粉と炎に炙られ、頬が熱く火照ってくる。

アルニールの民達は黒煙に咳き込みながら、それでも歩き続ける。助けを求める女の悲鳴。飛び交う怒号。混乱の中、親とはぐれた子供が泣き叫ぶ。

まるで悪夢のようだと思った。

だが本当の悪夢が始まったのは、その直後だった。

目指す避難所の方向から騎馬隊がやってくるのが見えた。黒煙を不吉なマントのようにたなびかせ、十数騎の騎影が駆けてくる。

ケナファ騎士団が助けに来てくれたのかと思った。

が、すぐに違うとわかった。

「エトラヘブ神聖騎士団だ！」

切り裂くような悲鳴が上がる。
町に逃げ戻ろうとする人々。炎に追われて町を出ようとする人々。大勢の人間が押し合い、ぶつかり合い、大通りは恐慌に陥った。
「容赦はいらぬ。すべて斬り捨てよ！」
笑いを含んだ男の号令。
馬上の騎士達が剣を抜き放つ。
神聖騎士達は縦横無尽に馬を走らせる。人々は悲鳴を上げて逃げまどう。斬り倒された体から吹き出す鮮血。馬の嘶き。踏み砕かれた手足。頭を割られた老婆が倒れる。泣き叫ぶ女が喉を裂かれる。親を捜して泣く幼子が、次々と蹄にかけられていく。
阿鼻叫喚の直中に、私は呆然と立ちつくした。
働き者で心優しいアルニールの民達。
慎ましくささやかな幸せを守ってきた人々。
その幸せが、未来が蹂躙されていく。
こんなことが許されるはずがない。光神サマーアがこんな暴挙をお許しになるはずがない。
「おやめなさい！」と叫ぼうとした。が、それより一瞬早く、サフラが私の口を押さえ裏道へと引きずり込む。「ここは危険です。館に戻り、身を潜めて、救援を待ちましょう」
私はその手を振り払い、サフラを振り返った。
「何を言うの。私はジャサーラ・アルニールの娘。領民を置いて逃げるわけにはいかないわ」
「お嬢様をお守りするのが私の役目です」
サフラは小剣の柄に手をかけ、私を見上げた。その顔は怖いほど真剣だった。いざとなれば私を昏倒させてでも、この場から連れ出そうという意志が透けて見えた。腕力ではサフラにかなわない。不承不承、私は頷くしかなかった。
私達は裏道を抜け、屋敷に戻った。
けれど屋敷内にも、すでに神聖騎士団が入り込んでいた。二階から卑下た嘲笑が聞こえてくる。どうやら父や私の私室を漁り、装飾品や調度品を物色しているようだ。

私達は足音を忍ばせて廊下を抜け、地下への階段を下った。地下倉庫には乾燥させた葉煙草（スィガーラ）の葉を詰めた袋と、年代物の葡萄酒（マハル）の樽が並んでいる。その大樽の隙間に私達は身を隠した。

「お怪我はありませんか？」

小声で囁き、サフラは私の顔を覗き込む。扉の下から忍び込む薄明かりの中、その頬に点々と血が飛沫（しぶ）いているのが見えた。よく見れば、私の腕も服も血と泥と煤で汚れている。

堪えきれず、私は呟いた。

「光神サマーアはどうしてこんな非道をお許しになるの？」

影使いとはいえ、人であることに変わりはない。家族を大切に思い、愛する人を守りたいと思う気持ちに変わりはない。なのに――

「こんな非道をお許しになるのなら、私は神など信じない。そんな存在を、私は神とは認め――」

サフラが素早く唇に人差し指を当てた。

靴音が近づいてくる。

続く言葉を飲み込み、私は唇を噛みしめた。

扉を開く音がした。光木灯の明かりが差す。乾燥肉を咀嚼（そしゃく）するくちゃくちゃという音とともに、浮かれた声が叫ぶ。

「うひょぅ！　今夜は飲み放題だぜ！」

神聖騎士団だ。

とうとうここまでやってきたのだ。

「飲む前にきちんと探せよな」

「わかってるさ」

葉煙草（スィガーラ）の袋が投げ出される音。

「で、そのアルニール伯の娘。すげぇ美人だって話、ホントなんだろうな？」

「本当さ。前に見たことあるんだ。殺すにゃもったいねぇほどの美人だった」

冷やかすような口笛。

「そりゃ、ぜひとも一番乗りしとかねぇとな」

「冗談、オレが先に決まってるだろうが」

私は手探りでサフラの手を取った。
その掌に指で文字を書く。
『私を殺せ』
暗がりの中、サフラが息を飲む気配がする。
『私は騎士の娘。奴らに辱められるくらいなら、潔く死を選ぶ』
まるで遮るように、サフラは私の手を握った。
そしてもう一方の手で私の掌に答える。
『貴女のことは私が守る』
私はサフラを見上げた。
わずかな光を反射して焦茶色の瞳が輝く。それは暗闇に灯された篝火。息を飲むほど美しい炎。
サフラの冷たい指先が、私の掌に言葉を綴る。
『貴女は私を助けてくれた。生きる目的を与えてくれた。貴女のためになら、この身が結晶化しても悔いはない』
次の瞬間、鳩尾に衝撃を受けた。当て身を受けたのだと理解するよりも早く、目の前が暗くなる。息が出来ない。叫びたくても声が出ない。
遠くからサフラの声がする。
「さよなら、ハウファ様」
その気配が遠ざかる。男達の怒号が聞こえる。何かが押し潰されるような音がする。地下室に強風が荒れ狂い、大きな酒樽がぐらぐら揺れる。
薄れていく意識の中、私はそれを理解した。
サフラ……ああ、サフラ――
貴方、影使いだったのね。

気を失っている間に夢を見た。
サフラに出会った時の夢だった。
当時、私は十二歳。大人でもなく、もはや子供でもない。そんな背伸びをしたい年頃だった。私は皆の役に立ちたいと願い出て、アルニールにひとつしかない治療院で怪我人の手当てを手伝っていた。
ある日、そこに奴隷の子供が運び込まれてきた。旅の途中で熱病にかかり、捨てられたらしかった。

「厄介な物を拾ったものだ」
　高熱に浮かされるその子を、大人達はもてあましているようだった。
「伝染するといけない」
「可哀相だが処分するしかないな」
　それを聞いて私は憤った。この子はまだ生きている。必死に生きようとしている。なのにどうしてそんな残酷なことが言えるのだ？
「この子は私が看病します」
　私が宣言すると、大人達は驚き、困惑した。
「無茶を言わないで下さい、お嬢様」
「流民一人のために、この町を危険にさらすことは出来ないのです」
「ではこの子を離れの小屋に運びなさい。もし私がこの子と同じ病にかかったなら、その時は私ごと小屋に火をかけなさい」
「馬鹿なことを仰らないで下さい。お嬢様はアルニールの家を継ぐ大切なお方なのですよ？」
「人の命は平等です。流民だろうが貴族だろうが命の重さに変わりはありません」
　無茶なことを言ったと思う。だがあの頃の私は正義がまかり通ると本気で信じていたのだ。
　父をはじめとする大人達の反対を押し切り、私は不眠不休で看病にあたった。その甲斐あって子供は少しずつ回復していった。
　意識を取り戻したその子は、何度も何度も私に礼を言った。
「困っている者を助けるのは小領主の娘として当然の務めです」
　細かく砕いた小麦の粥（ヘタージュ）を食べさせてやりながら、私は言った。「それで、お前の名前は？」
「ずっと奴隷として生きてきたんで――名はありません、です」
「なら、今まで何と呼ばれてきたのです？」
「『おい』とか『こら』とか『このクズ』とか」
　そう言って、その子は恥じ入るように俯いた。

流民の子供は奴隷として売られる。その多くは名前すら与えられず、家畜同然に扱われる。そんな厳しい現実を当時の私はまだ知らなかった。ただ優しい父や町のみんなに甘やかされて生きてきた自分を、とても恥ずかしく思った。

「では今日からお前をサフラと呼びます」

私の言葉にサフラは目を見張った。

「サフラ――？」

「古い言葉で『月』という意味です。私達には見ることは叶いませんが、月とは暗い夜空を明るく照らすものなのだそうです」

「そんなキレイな名前……」サフラはおどおどと目を伏せた。「私には似合わない、です」

「人の価値は生まれで決まるわけではありません。どのように生きたかで決まるのです。その名に恥じぬよう生きればいいのです」

その細い手を握り、私は言った。

「サフラ、私の友達になってくれますか？」

「も……もったいないお言葉……」

サフラの焦茶色の目が潤み、こけた頬を涙が伝い落ちた。「私にあるのは卑しいこの身だけ。お嬢様に救われたこの命だけ、です」

呟くように言って、サフラは私に頭を下げた。

「私の時空はすべてお嬢様のもの、です」

こうしてサフラは私の従者となった。頼もしい護衛として、かけがえのない友人として、私の傍には常にサフラの姿があった。

私はサフラに読み書きを教えた。そしてサフラは私に各地で見聞きしたことを話してくれた。

いろいろな土地を流れながら生きてきたサフラは、とても物知りだった。見たことも聞いたこともない土地の話に私は心躍らせ、自分も旅に出てみたいと願うようになった。

けれど貴族の娘が自由気ままに世界を旅することなど許されるはずもない。父は一人娘の私には甘かったが、それでも理由もなくアルニールを離れるこ

とはさすがに許してくれなかった。
　そこで私はサフラとともに空想の世界で遊んだ。旅の劇団にいたというサフラはたくさんの劇物語を知っていた。騎士達の英雄譚。王城での恋物語。私の部屋は舞台となり、私達は物語の世界に耽溺した。
　私は姫となり、サフラは騎士となって、世界中を旅して回った。神聖騎士団に虐げられている町の人々を救い、草原を縦横無尽に駆け回って夜盗と戦い、はるか大海原に漕ぎ出して幻の秘宝を探した。
　空想は尽きることがなかった。
　時間を忘れるほど楽しかった。
「私はハウファ様のもの」
　サフラは言った。悲しくなるほど優しい声で。
「私の望みはただひとつ。生涯ハウファ様のお傍にいて、ハウファ様に尽くすことです」
　私はサフラを愛した。たった一人の肉親である父よりも、私はサフラを愛した。幼い恋だと皆は笑った。年頃になれば忘れてしまうよ、と。
　笑いたければ笑うがいい。私は知っている。これほど真剣に誰かを愛することなどもう二度とない。サフラが傍にいてくれたらそれだけでいい。たとえ生涯アルニールを出ることが叶わなくても構わない。
　けれど光神サマーアは、そんなささやかな願いさえ許してはくれなかった。
　私は目を覚ました。
　あたりは暗く、静まりかえっていた。悲鳴も、神聖騎士団の声も、家々が焼け落ちる音も聞こえない。
　私は酒樽と酒樽の隙間に挟まれていた。身動きも出来ず、手を上げることすらままならない。
「サフラ――？」
　呼びかけても返事はない。
「サフラ！　答えなさい、サフラ！」
　私は叫んだ。声の限りに叫び続けた。神聖騎士団に聞かれても構わなかった。
「サフラ、返事をして！　戻ってきて！　私を一人

にしないで！」

やがて喉は嗄れ果て、声も出なくなった。

私は目を閉じ、息を止め、時間を止めようとした。サフラのいない世界など認めない。絶対に認められない。サフラのいない世界の空気を吸ってはいけない。時間を重ねてはいけない。心臓も呼吸もこのまま止まってしまえばいい。

なのに私の心臓は鼓動を続け、肺は新しい空気を求め、耐えきれずに息をしてしまう。いつまでも一緒だと誓ったのに、私だけが時に押し流されていく。時の隔たりが私とサフラを引き裂いていく。

櫓に挟まれたまま私は目を閉じた。浅い眠りに落ちては夢を見て目を覚ます。そんなことを幾度となく繰り返した。涙も声も嗄れ果てた。喉の痛みも手足の感覚も次第に失われていった。

心が罅割れ、砕けていく。

ゆっくりと私は死んでいった。

暗い地下室では昼も夜もわからない。神聖騎士団に見つかることもなく、助けに来る者もないまま、何日間が経過しただろう。

「ハウファ様――？」

誰かが私の名を呼んだ。力強い手が私の腕を摑み、櫓の隙間から私の体を引っ張り出す。

ぼんやりとした光の中、甲冑に身を包んだ男達が見える。その外衣に染め抜かれた翼の紋章。それはケナファ家の紋章だった。

「まだ息がある！」

ケナファの騎士が私を抱き上げる。視界が揺れる。私を抱いた騎士は階段を駆け上り、屋敷の外へと走り出る。

天を覆う灰色の時空晶。焼け焦げた家々から細く黒い煙が立ちのぼる。道は赤黒い泥にぬかるんでいる。そのあちこちに無数の黒い塊が転がっている。

それは、おびただしい数の遺骸だった。

アルニールは略奪され、火をかけられ、完膚無きまでに破壊されていた。その住人達は女も子供も、

影使いもそうでない者もすべて虐殺された。
父も死んだ。サフラの行方はわからなかった。影使いはすべての時空を失うと結晶化して砕け、骨さえも残らないという。私はサフラを埋葬してやることすら出来なかった。
なのに私は何も感じなかった。
怒りも悲しみもなく、涙も流れなかった。
私の心は死んでしまった。
炎の中で死んでいったアルニールの民達や、父やサフラとともに、私の心は死んでしまったのだ。

惨劇の夜を生き残ったのは、私を含めてほんの数名だけだった。そのわずかな生存者はケナファ騎士団の居城であるサウガ城へと移された。
私はコーダにあるケナファ侯の屋敷に招かれ、そこでエズラ・ケナファと会った。人払いをした部屋で、彼は私に真実を話してくれた。
「影使い達を集め、彼らに居場所を作りたいと言ったのは私なのだ。もちろん危険は承知していた。充分に警戒したつもりだった。まさかエトラヘブ卿があのような強硬手段に打って出るとは思ってもみなかった」
苦痛に顔を歪め、ケナファ侯は深々と頭を下げた。
「すべては私の甘さが原因だ。アルニール伯や貴女をはじめとするアルニールの民達には詫びる言葉もない」
アルニールの襲撃を指示したエトラヘブ卿は神聖院でこの問題を取り上げ、自らの正当性を主張したのだという。アルニール伯は影使いを集め、光神王への反逆を企てた。それゆえに自分は彼を討伐したのだと。
影使い達を匿ったことがケナファ侯の指示だと知れたら、ケナファ侯も罪に問われる。彼が厳罰を受ければケナファ領は没収され、エトラヘブ聖教会直轄領に併合される。そうなれば領民達は重税を課せられ、奴隷にも等しい扱いを受けることになるだ

ろう。

大将軍エズラ・ケナファは光神王の信頼も厚く、民衆にも人気があった。彼は常に民の立場を考え、神聖院にも意見する。六大主教にとっては目障りな存在だった。そんなケナファ侯を政（まつりごと）の舞台から追い落とすこと。それこそが神聖騎士団にアルニールを襲わせた真の目的だったのだ。

「すべてはエトラヘブ卿が仕組んだこと。けれど反論は出来ぬ。ケナファ領を守るためには知らぬ存ぜぬを貫き通し、アルニール伯には逆賊という汚名を被っていただかねばならぬ。身勝手な言い分だということは重々承知している。許してくれとは言わぬ。怨んでくれて構わない。だからどうかこのことは貴女の胸の内にのみ、留めておいていただきたい」

「怨んではおりません」

嘘ではない。あの日以来、私は泣くことも怒ることも出来なくなっていた。私の心はアルニールとともに朽ち果てた。心を持たない者がどうして誰かを怨むことなど出来よう。

「父はすべて承知しておりました。承知の上でお役目を引き受けたのです」

淡々と言う私にケナファ侯が何を感じたのかはわからない。誰かの心を推し量ることさえ、私には不可能だった。

でも、これだけは理解出来る。

ケナファ侯が私に「貴女を養女に迎えたい」と申し出たのは、皆が噂したように、私を後添えに迎えるためではない。ケナファ侯は今でも亡くなった奥様を愛していたし、その忘れ形見であるイズガータ様を心から愛していた。

彼が私を引き取ったのは、罪悪感からだった。

館の者達の献身的な看護を受けて、私の体は少しずつ回復していった。

私はそれが不思議でならなかった。

なぜ私の体はこうも浅ましく生き続けようとする

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。